事例　教育力の強化 **学生の人間力を育てる興動館教育プログラム** **～広島経済大学～**	☆本事例の中心人物 学長

事例内容

【概要】

石田学園広島経済大学は社会学系複数学科を設置する大学である。同大学は社会が期待する人材を育成するという観点に立ち、「ゼロから立ち上げる」興動人の育成をスローガンに新たな教育プログラムを開発した。このプログラムは実践を重視し、起業やボランティアなど様々なプロジェクトを学生が企画し実践する場を提供する。さらに実践に必要とされる科目群を用意し、学生は実践に必要な知識を豊富な科目群の中から履修し知識・能力を修得してプロジェクトの推進に役立てている。本プログラムは、従来の社会学系大学の伝統的な知識提供型教育と異なり、大学での授業が社会の活動の中でどのように活かされるのかを学生に気づかせ、主体的に知識を獲得する姿勢を育成している。

【背景】

日本の社会学系大学が行う講義を主体とした教育が、社会が期待する人材の育成に十分につながっていないという認識に立ち、新しい社会学系教育プログラムについて検討した。

検討の中では経済団体が行った企業が求める人材像や知識・能力・態度などを基に様々な角度から調査、分析し、実践と知識の修得を融合した教育プログラムを開発した。

このプログラムの開発には、大学側の人材育成への熱い想いが背景にある。

【取組み内容】

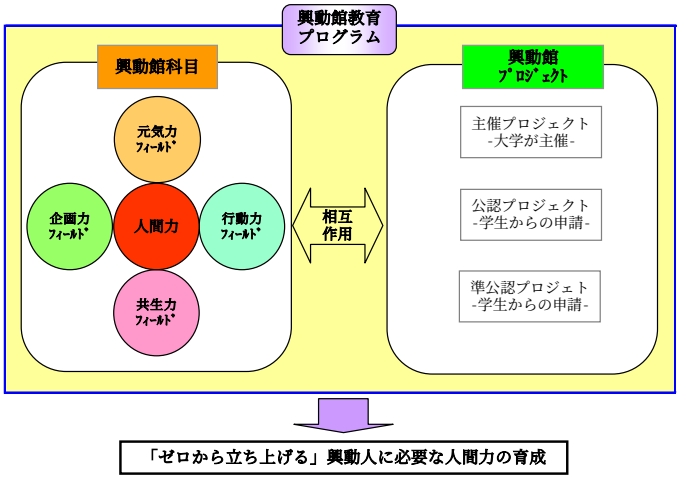
このプログラムは、「興動館科目」と「興動館プロジェクト」の 2 つのプログラムから構成されている。

「興動館科目」は経験や実践する場の提供を目的とし、「元気力」「企画力」「行動力」「共生力」の４つのフィールドにより構成している。各科目には少人数・双方向授業・体や手を動かす・フィールドワーク重視・発表重視の条件を課している。なお、「興動館科目」は自由選択科目に属し、単位を付与している。

「興動館プロジェクト」は学生が主体となり、国際交流・社会貢献・地域活性化・経済活動等に関する活動を学生同士が集団で行うものである。プロジェクトの企画・準備・実行・交渉・予算管理・報告・発表などすべてを学生主体で行う。この活動を通して実社会で必要な「人間力」を養い、「ゼロから立ち上げる」興動人を育成することを目的としている。

プロジェクトの遂行に必要な知識を興動館科目で修得し、知識をプロジェクトで実践するという相互作用を生んでいる。

【イメージ】



【効果】

①学問への興味の芽生え

プロジェクトの活動を通じて学生自らが必要な学問に興味をもち、知識を得ようとする姿勢が身に付く。学問修得の依存的姿勢から主体的姿勢への転換。

②リーダーシップと協調性の育成

多人数で活動することによりリーダーシップの意識が生まれ、仲間との協調性が育まれる。

③コミュニケーション力の育成

コミュニケーションがプロジェクト遂行に必要であることを認識し、自己表現力、理解力が育まれる。

④社会常識の修得

企業や地域社会と接点を持つことにより、ビジネスマナーや社会人としての姿勢、言動が育まれる。

【苦労している点】

○学生と指導教員との関係

主体は学生であるので教員はあくまでも支援者でなければならない。特にプロジェクトの推進では学生にイニシアチブをもたせなければならず、指導と支援の区分に苦労している。また、プロジェクトの推進では教員が専門外のプロジェクトを指導しなければならない場合もあり、教員にも新たな取り組みが求められる。

☆成功のポイント

①経営者層に強いリーダーシップが備わっていた。

②学内外に情報を開示し、支援を仰ぐことができた。成果を上げることを急がない姿勢があった。

③スタート時点で学生自らがゴールを定め、ゴールに向けて学習、活動することを気付かせることができた。

★今後の課題

①プロジェクト参加希望者の急増と支援体制の充実

興動館プロジェクトへの申請が急増しており、教員や事務局の増強、改善が見込まれる。

②興動館科目の拡大

学生からの要望や多様化するプロジェクトに対応するため、興動館科目の拡大、充実と教員への支援要請、従来科目との連携を検討している。

③キャリアセンターとの連携

興動館教育プログラムで得られた知識、能力等を社会で活かすことができるようにキャリアセンターと連携し、学生の卒業後の進路指導を充実する。

○委員の所感

このプログラムはマネジメントの実践であり、人間の成長に必要な“場”を提供するプログラムである。企業内研修で行われているコア人材育成プログラムに類似する点もあり、まさに社会が求める人材の育成プログラムであるといえる。プログラムでは常に学生を中心に置き、学生の主体性、自立（律）姿勢を引き出している。教職員は学生を支援する姿勢を貫き、学生に学問への“気づき”、起業やプロジェクト推進での失敗と成功を通して成長を体験させている点に好感が持てる。

学長の「たき火に当たる者ではなく、自らがたき火となり人を暖めよ」という人材育成への熱い想いが学生、教職員さらには地域社会へこのプログラムを広げている。